

『ハムレット』におけるケルトの表象

——生け贄を捧げる者

熊 倉 麻 名

1. 序

シェイクスピア (William Shakespeare) 作品の中に、「ケルト」(“Celtic”)という言葉で総称されるスコットランド、アイルランド、ウェールズの表象が含まれていることは度々論じられている。マイヤーズ (Brendan Cathbad Myers) は『テンペスト』(*The Tempest*)、『お気に召すまま』(*As You Like It*)、『マクベス』(*Macbeth*) をスコットランド劇 (“That Scottish Play”) と呼び、ケルトの主題とイメージの存在を指摘している (22)。 *Celtic Shakespeare: The Bard and the Borderers* には、作品ごとのケルトの主題についての批評が集約されている。ところがこれらの批評には『ハムレット』(*Hamlet*) についての議論が含まれてない。シェイクスピアが、スコットランドと英国間の問題を主題とした *Ur-Hamlet* (原ハムレット) を材源として『ハムレット』を創作したにもかかわらずケルトとの関連は明確には示されていない。ケリガン (John Kerrigan) は *Celtic Shakespeare: The Bard and the Borderers* のエピローグで、『ハムレット』の最終章でデンマーク統治を引き継ぐことになるノルウェー王フォーティンブラスをスコットランド人俳優 Gerard Butler に演じさせて、英国王となったジェイムズ一世を投影させる演出を紹介しているが、『ハムレット』の主題はケルトと英国間の政治的問題ではないと述べている (xvii)。しかしながら、『ハムレット』のテーマには宗教、文化、慣習面に注目すべきケルトの表象が存在する。本稿ではハムレットの言葉と行動に焦点をあてながら、ケルトの表象が作品中どのような役割

2 熊倉麻名

を果たしているか考察する。

2. ケルトの表象

「ケルト」(“Celtic”)について言及した記述で現存するギリシア・ローマ時代の著作には、ギリシア人が「ケルトイ」(“Keltoi”)と呼び、ローマ人が「ケルタエ」(“Celtae”)、「ガリー」(“Galli”)と呼んでいた人々について事実や憶測を交えた記述がある。現在私たちが使っている「ケルト」という言葉は、カエサルがガリア中部の人々の呼称として使用した「ケルタエ」に由来している。ケルト人にはケルト帝国と呼べるような国家や民族集団があったわけではないが、社会構造や宗教や物質文化の点では多くの共通するところがあった。ルネサンス時代には、ギリシア・ローマ世界への興味とイングランドやフランスの個々の地域の土着文化への関心がよみがえりギリシア・ラテン時代の研究が再燃した (James 8–9)。メアリー女王 (Mary Stuart) やジェイムズ 6 世 (James VI)、のちのジェイムズ 1 世王 (James I) のチューターを務めたスコットランドの学者ブキャナン (George Buchanan: 1506～83) は、*Rerum Scotarium Historia* でケルトの人々はスペインを通してアイルランドとスコットランドに到達したが、直接ブリテンに到達したものはウェルシュ語をもたらしたと述べ、彼の著書はその後一世紀にわたって何度も出版された (Morse 15)。ケルトには単一民族による帝国は存在しなかったが、「ケルト語」の分布から「ケルト」の社会構造、宗教、物質文化への研究が続けられた。シェイクスピア作品の中にケルトの表象が多く見られるのは、彼が生きた時代にケルト研究が盛んにおこなわれたことと英国支配となったのちにケルトの人々がもたらした独自の文化に由来すると考えられる。

13 世紀にウェールズが独立を失い、アイルランドはエリザベス 1 世の治世にイングランドの支配下となった (James 13)。そのような社会背景の中で創作された『ハムレット』にアイルランドの表象が見られるのは 1 幕 5 場である。デンマーク王子ハムレット (Hamlet) は亡き父つまり先王と思

われる亡霊から叔父クローディアス (Claudius) が暗殺により王位を篡奪したという経緯を聞く。「何か悪いことが？」(Ham. 1.5.135) と少し離れたところから近寄って来たホレイシオ (Horatio) に対してハムレットは「それが、聖パトリックの名に懸けて悪いことがあるのだ、ホレイシオ。ここでその亡霊に会ったのだが、その者が嘘を話しているわけではないと言わせてくれ。何があったのか知りたいだろうがそれは我慢して欲しい。」(Ham. 1.5.136-40) と答える。アイルランド伝説の聖人パトリック (St. Patrick) の名前を口にするにはデンマーク王子ハムレットにはふさわしくない。もしシェイクスピアが英国人であるから英国で馴染みの習慣を取り入れたと考えたとしても、何故この場に挿入したのかは疑問だ (Moore 93)。加えて彼の留学先は 1517 年にマーティン・ルター (Martin Luther) が 95 か条提題を教会の扉に貼り付けた、まさにそのドイツのウィッテンバーグ (Wittenberg) でありプロテスタントの背景が色濃い。会話相手のホレイシオはウィッテンバーグからハムレットを心配して後を追ってきた学者 “scholar” (Ham. 1.1.42) であり、亡霊に対して懐疑的である。この態度は、亡霊を悪魔の使いと考えた聖書の教えに起因する。¹

亡霊は「私はおまえの父の霊だ。定められたしばらくの間夜はさまよい歩く運命にある。昼は火のなかに留められている、生きている間に犯した罪が焼き尽くされ清め去られる日まで。」(Ham. 1.5.9-13) と語り始める。実の弟クローディアスによる暗殺の経緯を説明し、息子として父親の復讐を遂行するようハムレットに求める。当初抱いていた亡霊に対するハムレットの懐疑心は、「よくやったと言おう、モグラよ。地面の下をそんなに早く移動できるのか？」(Ham. 1.5.162) という言葉に表されている。敬愛する父親への言葉とは考えられず、ハムレットが亡霊の言葉を直ちに信じたわけではないことを証明している。しかしながら、次第にその懐疑心は消えていく。図版 1 はビュッツブルク大学図書館所蔵 *Hugo Ripelin von Straßburg* “*Compendium theologiae veritatis*” Book 3 の挿絵で、生きている者の世界と死者の世界である煉獄と地獄が描かれている。死者はモグラさながらに地



図版 1

面の下にいて、生者と死者が非常に近いところに存在していることが表されている。古代ケルトにおいて死とは隣の部屋に移動するようなものだった。これは死後の世界と生きている者の世界が非常に近い場所に存在しているという考えに由来する。この認識によってケルトの民話には、乳飲み子を残して死んだ母親が自分の子どもを連れに戻って来たり、花嫁を残して死んだ男が彼女を連れ去りに戻ってくるなど、死者と生きている者が実際にかかわりを持つ物語が存在している (Curran 149)。「この天と地の間には、ホレイシオ、君の哲学では夢に思わないようなことがあるのだ。」

(*Ham.* 1.5.164–67) というハムレットの言葉によって、ケルト民話で語られているような亡霊や煉獄の存在を彼が肯定していることが示されている。ケルト文化とカトリック文化が『ハムレット』のなかで拮抗しているのだ。

プロテスタントの論者は16世紀から17世紀初頭まで「煉獄の存在」は偽りであると主張していた。彼らは死後の世界を現世と完全に切り離して考えるので「煉獄」というものの認識に反対し、ダンテ(Dante)の『煉獄』(*Purgatorio*)に代表されるように生と死、天国と地獄の間に煉獄が存在すると考えるカトリックとの間には衝突があった。しかしながらプロテスタントの人々は次第に自分たちの考え方には何か見落としているものがあるかもしれないとも考え始め、徐々に日々の生活の中で「煉獄中心」(*Purgatory central*)の考え方による物質的、精神的な影響を受容しはじめた。ハムレットの亡霊に対する気持ちの動きはプロテスタントの人々の変化と一致する。一方シェイクスピアは、舞台上にパニックを引き起こしこの世のものではない恐ろしさや登場人物の心の闇を投影する亡霊を信奉していた(*Greenbratt* 157)。

図版1右下の地獄にいる者たちは悪魔に監視され手さえ動かせない状態だが、左下の煉獄にいる人々は各々が自由に体を動かしており頭上には天使が飛んでいる。『ハムレット』の第5幕ではホレイシオが天使について言及する。ハムレットは父から王位を篡奪したクロードィアスを殺し復讐を遂げるが、レアティーズ(Laertes)が毒を塗った剣で刺されて死を逃れられない。ホレイシオは「おやすみなさい、やさしい王子。羽を持った天使があなたの眠りのために歌っています。」(*Ham.* 5.2.338–39)と永遠の別れを告げる。民衆が「謀反だ、謀反だ!」(*Ham.* 5.2.303)と騒ぎ立てる混乱の中、ハムレットは罪を告白する間もなく息絶える。彼が行きつく先は突然暗殺された父王同様に天国ではない。ハムレットが煉獄へ行くと考えたホレイシオは煉獄の天使について言及したのである。

「杯」“cup”(*Ham.* 5.2.322)と「ワイン」“wine”(*Ham.* 5.2.239)もまた5幕に組み込まれたケルトの表象である。クロードィアス王はハムレット

とレアティーズの手合わせ開始時に「ワインの杯をそのテーブルにおいてくれ。ハムレットが1本、2本と取ったら、あるいは3回目に相打ちとなったら、城壁の砲門を一斉に開いて祝砲を打て。王はハムレットの健闘をたたえて祝いの杯を与え、その杯には真珠が投げ入れられよう。」(*Ham.* 5.2.239–44)と言う。杯を渡す行為はケルトにおいては統治権の移動を意味する (Aguirre 163)。この場面では、その杯は王権篡奪者であるクローディアスが真の王権継承者であるハムレットにいずれ王権を渡すことを表明するそぶりを見せながら、実際には偽りの誘いの言葉によって王子を殺そうとする毒の杯 “the poisoned cup” (*Ham.* 5.2.270) である。

さらに、クローディアス王はハムレットを代理王として殺そうとしたと考えられる。代理王殺しは、ジェームズ・フレイザー (James George Frazer) が『金枝篇』(*The Golden Bough*) で未開社会の神話・呪術・信仰に関して記したヤドリギとしての金枝と「森の王」殺しのように、代理王を殺すことで本物の王を守り王国の繁栄を祈願する。ケルトのドロイドにおいてはヤドリギの秘儀があり、生け贄を用意したのち祭司が金の鎌でヤドリギを切る。そのヤドリギを飲み物に入れて摂取すると子宝に恵まれ、さらにどんな毒にも解毒の作用があるというのだ (James 95)。クローディアスが真珠の価値を強調しながらワインに入れハムレットに飲ませようとしたことは、代理王殺しの儀式を彷彿とさせる。だがハムレットに渡されるべき杯を母カートルド (Gertrude) が横取りする形で飲んでしまったことから毒の存在が暴かれる。また、ハムレットは毒を塗った剣により死を免れない状況にありながら、最後に敢えて毒の杯に残っていたワインを飲み干す。ケルトではワインには「再生」“rebirth”の意味があり、再生を願って墓に杯やワイン壺を収める習慣があった (Green, *Legendary* 77)。ハムレットがワインを飲んだのは、真のデンマーク王位の継承者が最期の時に王国の繁栄を祈念した行動である。

『ハムレット』は7人の登場人物が次々と命を落とす物語である。特にポーロニアスとオフィーリアの死は突然だ。ウルフ (Nicola Woolf) は、ハ

ムレットは「生け贄を捧げる人」(“sacrificer”)であると主張している(42)。ケルトではドルイド(“Druid”)の教義に基づく生け贄の慣習がある。つまりハムレットは復讐を成功させるためにケルトの慣習により生け贄を捧げたと考えられる。ドルイドの魔術については、シェイクスピアの『あらし』(*The Tempest*)のプロスペロー(Prospero)の魔術がしばしば指摘されるが、『ハムレット』においては何よりも重要な目的を達するために生け贄の秘術が使われている。

ドルイドに物や動物ではなく人間を生け贄とする習慣があったことは伝承や神話で伝えられたのみならず、実際の証拠が1984年の英国で発見されている。リンドウマン(“Lindow man”)と名付けられた2000年も前の鉄器時代の生け贄男性は、頭を殴られ首を切られ湿地の水たまりの中にうつ伏せに放置されていた。医学的検査の結果、彼は栄養状態が良い20代半ばの男性であることが明らかになった。爪にはきれいなマニキュアが施されていることから、労働者や農耕奴隷の階級ではなくある程度身分の高い者と推測されている。病気や大きな怪我の結果として死に至ったのではなく、国や生活共同体の何らかの危機の際に自ら進んで生け贄となり、その結果として暴力的な殺され方をしたのだらうと結論付けられた。発掘されたリンドウマンの胃からヤドリギの花粉が見つかったことから、彼はこの儀式の生け贄であったと推測されている(James 96-7)。生け贄の殺害方法は暴力的で非常に残酷で、アイルランド伝承のなかには王のために神に捧げる「火あぶり」、「刺殺」、「溺死」の三重殺人の方法が伝えられている(Green, *Gods* 122)。

シェイクスピア作品では、『タイタス・アンドロニカス』(*Titus Andronicus*)のなかで主人公は戦死した息子たちの魂を慰めるために人質として連行したゴート族の女王タモラ(Tamora)の長子を生け贄としたが、復讐相手の愛する者を生け贄として殺した点が『ハムレット』とは異なっている。『ハムレット』で最初に生け贄となったのは王の側近で、ハムレットが愛するオフィーリア(Ophelia)の父ポローニウス(Polonius)であり、ハムレッ

トの復讐相手ではない。ガートルードの居室で話をしていたポローニウスはハムレットが入ってくると壁掛けの裏に隠れるが、母の周りをうろつく「ネズミ」「a rat」(*Ham.* 3.4.26)として刺殺される。のちにハムレットは、父王暗殺の真偽を確かめるために王の前で旅の役者に演じさせる演目を『ネズミ捕り』“*The Mousetrap*”(*Ham.* 3.2.216)と名付けており、王をネズミに例えている。ハムレットは母の部屋の「ネズミ」を「王だろうか?」(*Ham.* 3.4.26)と言っている。「どぶねずみ」(“rat”)であるポローニウスが「はつかねずみ」(“mouse”)である王の代わりに刺されたことを示している。ポローニウスはクローディアスの代理王として殺されたのである(Aguirre 164)。シェイクスピアは「代理王殺し」、「生け贄」というモチーフを示唆している。ポローニウスは王のための「火あぶり」、「刺殺」、「溺死」という三重殺人の1つである「刺殺」によって屠られたが、彼はクローディアス王の生け贄だけではない。ポローニウスを殺した後、ハムレットは「この者にはかわいそうなことをしたと思う。だが神は喜んでおられる、このことによって私を罰し、私によってこの男を罰する。私は神のふるう鞭で、その代理人なのだ。死体は片づけよう、この男を殺した責任はどこまでも負うつもりだ。」(*Ham.* 3.4.173-8)と述べる。ポローニウスは叔父クローディアスの代理王という形で殺されたが、実際には本来王であるべきハムレットのための代理王であり生け贄だったのである。

ポローニウス殺害を知ったクローディアスは、体面を繕い事態を收拾するために遺体を探し出して礼拝堂に納めようとする。命令を受けたローゼンクランツ(Rosencrantz)がハムレットに「死体はどうしたのですか?」(*Ham.* 4.3.3)と問うと「死体は土と一緒にした。親類同士だからな。」(*Ham.* 4.3.4)と答える。生け贄であるがゆえに、のちにレアティーズが嘆くようにポローニウスが土に埋められる際には「記念碑も剣も紋章も遺骨に飾られず、公の儀式もなかった」(*Ham.* 4.5.209-10)のである。ハムレットはポローニアスの居場所をクローディアスに聞かれると「天国に。そこにいないとするともうひとつのところでしょう、ご自分で探しに行かれる

がいい。」(*Ham.* 4.3.31-2) と答える。生け贄としての役割を終えたポローニウスは天国か煉獄にいるだろうが、クローディアスは同じところには行けないという皮肉である。

ポローニウス殺害時にハムレットが母親の目の前でとった行動はあまりにも突然で暴力的に見えるが、これは生け贄を殺す際の暴力性はケルトでは神聖なものと考えられていることに帰する。一般的な「殺人」という認識ではなく、戦場における戦士の戦い、森の狩場での狩人と動物の命のやりとり、空を切り裂く稲妻や雷にさえ例えられていた。特別な目的のための宗教的行為として生け贄を捧げることが許されていたドルイドの教義において、すべての生き物の生と死は永遠に繰り返されていくもので、死とはある一定の短い休憩のようなものであり特に恐ろしいものではないのだ(Myers 49)。

ハムレットの突然の暴力性にはもう 1 つの理由が考えられる。剣を抜いたハムレットに対してガートルードが「何をするのです？ まさか私を殺そうというのですか？ 助けて、助けて、誰か！」(3.4.21-2) と慌てふためくほどに、ハムレットは自分を抑えられないように見える。「私は気が違っていただけではなく、偽の狂気なのだ。」(*Ham.* 3.4.188-89) と彼が言ってもそれは「奇妙で狂気じみた行動」(*Ham.* 1.5.170) である。原因は直前のシーンでクローディアスがハムレットを英国で暗殺する計画をハムレットが知ったことにある。もともとハムレットはウィッテンバーグに帰ることを望んでいたのに、狂気を理由に国を追われ秘密裏に葬られようとしていることに激しい憤りを感じたのだ。ケルトにおいて、罪人への刑のなかでは死よりも追放される方がより不名誉だとされていた(Myers 49)。ハムレットは不名誉にも、事実上デンマークから追放されたうえに死を与えられようとしていると知り強い怒りを抱いた。「ああ、今からはこの俺の胸を残忍で冷徹な考えで満たそう。」(*Ham.* 4.4.65-6) クローディアスの命令で英国まで彼に付き添ってきたローゼンクランツとギルデンストーンをハムレットは返り討ちにす。しかしながらハムレットにとって価値のないこ

の2人は彼の生け贄にはなり得ない。

『ハムレット』は3つの家族の悲劇の物語である。ケルトにおいて家族は3人で1つとされている (Cooper 181)。キリスト教的三位一体 “Trinity” ではなく、各々がそれぞれの考え方をもち異なる行動をとるという含意により “Triad” が重要視されている (Green, *Symbol* 170)。さらに、「3」は特別な数字で超自然なパワーや実体を有すると考える “Triplism” が信仰されている (Green, *Symbol* 208)。『ハムレット』の中の最初の3人家族は先王、王妃、王子で構成される理想的な王家であり原家族ある。2番目はクロード dias、ガートルード、ハムレットで構成される擬態家族で、王位篡奪と復讐のために殺し合う悲劇の偽家族だ。3番目の家族は1番目と2番目の家族の悲劇に巻き込まれたポローニウス、オフィーリア、レアティーズで構成される犠牲家族である。彼らはお互いを思いやる家族だが「高潔な犠牲者たち」 “virtuous victims” (Woolff 62) となる。愚かだが献身的に2人の王に尽くし盲目的に我が子たちに愛情を注ぐ父ポローニウスが最初の犠牲者である。彼の死体を引きずりながら退場するハムレットの「正しいことをするには残酷にならねばならない。このような悪い始まりになったが、後にはもっと悪いことが待っている。」 (Ham. 3.4.179-80) という言葉に象徴されるように、2人目の犠牲者となったオフィーリアの変貌と死は残酷で悲しい。ハムレットはオフィーリアに対して「おまえの父上はどこにいるのか？」 (Ham. 3.1.126) 「しっかり家の扉を閉めておけ、そうしないと外で馬鹿な真似をするかもしれないから、さようなら」 (3.1.128-9) と言っている。「さようなら」 “Farewell” (Ham. 3.1.129) は繰り返される。亡霊の言葉を信じて復讐を遂げるためにハムレットは愛するオフィーリアに別れを告げる。「尼寺へ行け、一刻も早く、さようなら。」 (Ham. 3.1.135)。“Farewell” とハムレットに突き放されたオフィーリアは “Oh woe is me” (Ham. 3.1.154) と答える。この言葉は小田島雄志訳では「ああ、なんて悲しい。」 (115) 河合祥一郎訳では「ああ、悲しい。」 (103) と訳されているが、語源は聖書の “woe unto me” または “woe is unto me” 「我に苦難あれ」、

「どのような苦難も受け入れます」から派生した言葉である。² つまりオフィーリアがさらなる苦難への覚悟をハムレットに告げた場面なのである。生け贄であるリンドウマン発見の前年にはリンドウウーマン (“Lindow Woman”) と名付けられた女性が発見されており、女性も生け贄にされていたと考えられている (Green, *Gods* 128)。何かを神に願う際の捧げ物は、通常は宝物のような無生物または動物の場合が多かったが、願いの大きさによっては人間も捧げられた。その人身御供は、願う者にとって重要で価値ある人間でなければならなかった。

劇中劇「ネズミ捕り」“The Mousetrap”をハムレットとともに見たのち、次にオフィーリアが舞台上に現れた時には彼女の心はそこにはない。「愛する者をなくしたら、自分自身の大切なものを差し出したくなるのだろう。」(Ham. 4.5.162–63) とレアティーズが言うように、大切な父親を亡くし愛するハムレットを失ったオフィーリアは自分の命を差し出す形でこの言葉を体現する。よじ登った柳の枝が折れて水に落ちたが、「水の中に生まれ、水の中で育つもののように」(Ham. 4.7.178–80) しばらくの間は美しい歌を口ずさみ、最後には川底へ沈んでいった。彼女は自分の命を愛するハムレットに捧げたのであり、それはつまり、ハムレットの大切な者が生け贄として捧げられたことに相違ない。さらに、この水死は王に捧げる三重殺人の中の「溺死」である。

ケルトの文化は元来水の文化である。アイルランドの聖河であるボイン川に由来する母神ボイン (Boyne) は自分の過ちを償うために泉の水に身を沈めて息絶える (Markale 42)。オフィーリアに罪があったとすれば、父や兄に逆らい身分違いのハムレットと恋仲になったことである。水には精神的・肉体的に浄化するという意味があり、地上と地下の世界を繋ぐ循環を司っている (Green, *Symbol* 155)。水によって浄化された純粹無垢で美しいオフィーリアが、神話の中で捧げられる生け贄のように命を失っていく姿は多くの画家の作画の動機づけとなってきた。

ハムレットがオフィーリアの死を知るのは墓場である。墓堀り男が掘り

出した頭蓋骨を手にしたハムレットの姿は、生け贄をささげたあとに狩った首を手につくケルトの戦士さながらである。ドルイドには生け贄とともに首狩りの風習があり、さらに狩った首を墓の装飾として埋葬に使い石柱の中に髑髏を埋め込んで墓石にもした (Green, *Gods* 29–30)。死を覚悟して復讐という目的に突き進むハムレットは、もはや狂気を装うことなくレアティーズに真実を告げる。「俺はオフィーリアを愛していた。兄がたとえ何万人集まろうと、俺ひとりの愛の大きさに勝ることはない。」 (Ham. 5.1.236–38) いかにも真剣にオフィーリアを愛していたかを説明しており、その誰よりも大切な女性をハムレットが生け贄にとして失ったことが示されている。

3人目の生け贄は墓場で髑髏を手にしたハムレット自身である。オフィーリアの葬儀の次の場面では自分自身の首が狩られるイメージをハムレットが語っている。「時を待たず、首切り用の斧を研ぐ間もおかず、俺の首をはねよということだ」 (Ham. 5.2.22–24) これはクローディアスから英国王への親書の内容であり、ハムレット暗殺が指示されていた。しかしながら彼の死は、自分自身が進んでおこなうもので、アイルランド伝承による三重殺人の「火あぶり」、「刺殺」、「溺死」の最後の1つである「火あぶり」でなければならない。その火は父王の亡霊が言及した煉獄の炎であり、死後に煉獄の火で焼かれる覚悟をもって自分自身を最後の生け贄として捧げる時が来たことを認識する。レアティーズとの手合わせを前にハムレットの心に起きた変化を心配して「気が進まないのならやめた方が良いのでは。」 (Ham. 5.2.190) というホレシオに対してハムレットは言う。

大したことではない。前兆などは無視しよう。雀が一羽落ちるのも神の摂理。今だというなら、後には来ない。来なかったなら後に来るだろう。今でなくても必ず来るのだ。死について何かもわからないなら、早く来てしまえばいいのではないか？ なるようになればよい (Ham. 5.2.192–96)

このハムレットのセリフが散文で書かれていることは大きな意味を持っている。シェイクスピアは様々な作品の中で韻文と散文を使い分けており、主に王侯貴族は韻文による言葉で威厳を示し、彼らが散文を使う時は気持ちが悪く乱れていることが示唆されることが多い。道化や庶民の散文による言葉は教養のなさを暗示し、面白くおかしな話を強調することもある。実際、ハムレットが墓掘りの言葉に合わせて散文で会話しているのは笑いを演出しているからであり、ここで注目している散文の効果とは異なる。このハムレットのセリフは例えば、『ジュリアス・シーザー』(*Julius Caesar*)でシーザーを暗殺したブルータスが、その行為の大義名分を大衆に向かって説き正当性を主張するために使った話法と同じである。

皆さんの英知で私を裁いてしてほしい、皆さんの思慮分別をお願いします。そうすればより良い決定が下せるでしょう。この中にシーザーの親友がいたならば、その者に向かって言いたい。ブルータスはその者よりもシーザーを愛していたと。その者に、何故ブルータスがシーザーに反旗を翻したのかと答えを求められたら、私の答えはこうだ。シーザーを愛していなかったわけではない、シーザーよりもローマを愛しているからだ。(JC 3.2.16-20)

ブルータスの言葉は自分の行動を肯定し大衆を説き伏せるための戦略として大衆が理解しやすい散文を使ったのである。だがハムレットが納得させようと話しかけていた相手は自身を含む世の中のすべての人々である。さらに、彼が述べているのはこれから起こることであり、自分自身が生け贄として死を迎え、その後は煉獄の炎に焼かれることへの覚悟を生死を問わずすべての存在に向けて表明している。

ハムレットの悲劇は終わりを迎えるが、『ハムレット』という物語のもう1つの重大な悲劇は幕切れに残されている。それはデンマークの王位を継ぐ者がなくノルウェー王フォートインブラスに託される点である。これは『マクベス』(*Macbeth*)において王位がダンカン王(Duncan)の正当な継承者である長男マルコム(Malcolm)の手に戻される幕切れと異なる。ケルト

の物語「サガ」(Saga)に描かれている亡霊は、登場人物たちが住んでいる地域一帯で人々を殺害し住みかを奪い、極めて暴力的に壊滅へと導くという(Kelchner 66-72)。これはキリスト教的な悪魔の化身としての亡霊が、亡霊を信じたものに破滅をもたらす物語とも異なるが、いずれにしろ亡霊によって悲劇がもたらされる。『ハムレット』においては亡霊自身が暴力的破壊や殺戮を行ったわけではないが、結果的には多くの殺人によって物語は終結し、継承者は根絶やしとなって王国の存続・安寧は得られない。

3. 結論

『ハムレット』でしばしば論じられる亡霊の存在、ハムレットのポローニアス殺害、オフィーリアの溺死、終幕のフォーティンプラスの登場などは、ケルトのドルイド、慣習、神話の影響を受けている。その効果は罪なき者を生け贄にする復讐悲劇の無常さを演出し、髑髏やハムレットの生首を想像させることによって迫りくる死の恐ろしさや殺人の生々しさを観客に想像させた。『ハムレット』の中に隠されたケルトの表象を掘り起こすことは作品の悲劇性をより強く感じることである。

注

1 マタイ伝 22 章 32 節「神は死者の神ではなく生きている者の神である。」亡霊は神の使いではないことを示している。

2 ヨブ記 10 章 15 節「私が悪いのならば私に災いを。」

図版

1. Greenblatt, Stephen. *Hamlet in Purgatory*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2001. p. 59.

引用文献

- Aguirre, Manuel. "Life, Crown, and Queen: Gertrude and the Theme of Sovereignty." *The Reviews of English Studies*. Vol. 47. No. 186, May. 1996. pp. 163-74.
- Cooper, Jean C. *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols: with 210 Illustrations*. London: Thames and Hudson, 1978.
- Curran, Bob. *Complete Guide to Celtic Mythology*. Belfast: the Appletree Press Ltd., 2000.

- Green, Miranda Jane. *The Legendary Past: Celtic Myths*. London: The British Museum Press, 1993.
- . *The Gods of the Celts*. Gloucester: Alan Sutton Publishing Limited, 1986.
- . *Symbol and Image in Celtic Religious Art*. New York: Routledge, Chapman and Hall, Inc., 1992.
- Greenbratt, Stephen. *Hamlet in Purgatory*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2013.
- James, Simon. *Exploring the World of the Celts*. London: Thames and Hudson Ltd., 1995.
- Kelchner, Georgia Dunham. *Dreams in Old Norse Literature and their Affinities in Folklore, with an Appendix Containing the Icelandic Texts and Translations*. Cambridge: Cambridge University Press, 1935.
- Markale, Jean. *Nouveau Dictionnaire de Mythologie Celtique*. Paris: Pygmalion Gerard Watelet, 1999.
- Moore, Ursula J. “Celtic themes in Shakespeare’s Plays.” *Proceedings of the Harvard Celtic Colloquium*. Vol. 1 (1981): 91–4. Print.
- Morse, Michael A. *How the Celts Came to Britain: Druids, Ancient Skulls and the Birth of Archaeology*. Gloucestershire: Tempus Publishing Ltd., 2005.
- Muley, Willy and Rory Loughnane. *Celtic Shakespeare: The Bard and the Borderers*. Surrey and Burlington: Ashgate Publishing Limited, 2013.
- Myers, Brendan Cathbad. *The Mysteries of Druidry: Celtic Mysticism, Theory & Practice*. Franklin Lakes: The Career Press, Inc., 2006.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. The New Cambridge Shakespeare. Ed. Philip Edwards. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- . *The RSC Shakespeare: William Shakespeare Complete Works*. Eds. Jonathan Bate and Eric Rasmussen. Hampshire: Macmillan, 2007.
- Woolff, Nicola. *Shakespeare’s Tragic Family: Sacrificers and Victims from Cain to Hamlet*. Canada: ProQuest Dissertations Publishing, 1998.
- ウィリアム・シェイクスピア著、小田島雄志訳、『ハムレット』、白水社、2017。
- 、河合祥一郎訳、『新訳ハムレット』、角川書店、2017。